
寒河江慈恩寺本堂の絵馬調査と応急処置

Votive tablets “Ema” Research and first aid of the main hall of Buddhist temple “Jionji” in Sagae.

大山 龍顕 | Tatsuaki OYAMA

This report is a survey of the votive tablet “Ema” in the main hall of a Buddhist temple of Jionji, Sagae that I carried out 2011. 20 works in there become the very precious cultural treasures in the oldest works in Yamagata. Therefore I carried it out from a viewpoint of the preservative consevation of the work in this Research.

In addition, I improved the safekeeping situation of works by having taken a first aid with Research.

It is small, but decides to report that it is useful for the preservation of the future votive “Ema” to think.

1. はじめに

本報告は慈恩宗慈恩寺本堂の絵馬について、平成23年度に作品の状態調査を行った際の調査報告を加筆修正しており、作品の保管状況や、損傷等についてまとめたものである。

絵馬の調査についてはこれまでも各地で盛んに悉皆調査などが行われており、多大な成果を上げている。しかし、保存や損傷に視点をあてて調査が行われることは少ないようである。

また、調査に際し、紙に描かれた絵馬の保存状態の改善を図るため応急的な処置を行った。課題となる点もあるものの、これにより一定の成果を上げることができた。そこで、今回の調査の概要と行った応急処置の取り組みについて、簡単ではあるが報告することとしたい。

2. 調査概要

(1) 慈恩寺について

JR羽前高松駅から、国道112号線(旧六十里越街道)を抜けて寒河江大橋を越え、国道287号線を1kmほど北へ向かうと、葉山の南麓に位置する慈恩寺に至る。[写真1] 麓からうねるような細い参道を登り、杉木立に囲まれた広大な境内の中に堂社が立ち並んでいる。山門をくぐると、正面に本堂(国重要文化財)があり[写真2]、向かって右手に不動堂・薬師堂・阿弥陀堂・左手には鐘楼・天台大師堂・釈迦堂・三重塔が立ち並ぶ。

慈恩寺は山号を瑞宝山。天台真言両宗慈恩寺派。本尊は弥勒菩薩。縁起によれば行基が開山し、聖武天皇の勅命により印度僧婆羅門僧正が天平18年(746)に開基したという。鳥羽天皇の勅命により天仁元年興福寺願西が藤原基衡が奉行として仁平年間まで仏閣整備が行われた。保元2年に一山堂社が炎上したが、文治元年に高野山の弘俊阿闍梨が再興し、山号を寒河江山から瑞宝山と改め、熊野権現を鎮守にしたという。

鎌倉期に入り、大江広元が寒河江荘地頭に補されると、大江氏の庇護を受け、天正12年に大江氏に代わって支配者となった最上氏も保護を加え、慶長13年には義光が三重塔を、元和4年には家親・義俊によって現在の弥勒堂が建立された。元和8年に最上氏が改易さら後は、江戸幕府から寺領安堵をされ、朱印高2812石3斗余りを与えられた。

慈恩寺は享保6年では真言方学頭に宝蔵院・華蔵院が、天台方別当として再上院の三カ院を支配職として、その下に48院坊からなる一山組織の寺院であったが、慶応4年の神仏分離令と明治4年の寺領上知令では大打撃を受け、各坊も衆徒としての性質を弱め、昭和28年以後は天台真言両宗慈恩寺派として一派をなし、現在は3カ院16坊となっている。

現在の本堂は山形城主最上義俊によって元和4年(1618)に再建されたもので、桃山の様式を残す茅葺・単層入母屋造りの建築で、本堂内は外陣と内陣に分けられ、内陣内部には木造弥勒菩薩及諸尊像が納められている。薬師堂の木造薬師如来及び両脇時像を取り巻く木造十二神将立像、阿弥陀堂の木造阿弥陀如来坐像はいずれも国重要文化財となっている。数多くの文化財を有し、5月5日に行なわれる祭礼一切経会で奉奏される¹林家舞樂も国無形民俗文化財となっているなど東北を代表する古

利となっている。

(2) 山形県の絵馬について

日本では神は馬に乗って遷座するとの思想から、生馬を神々に奉納したといわれる。人と馬との関わりは弥生時代に遡り、古墳時代の遺跡から出土する馬具や埴輪は、人と馬との深い繋がりを物語っている。

絵馬は奈良時代には既に見られ、日本各地から当時の遺品が出土している。山形県内の川西町・道伝遺跡からも二面の「神馬図」が見つかっている。絵巻物の画中に描かれた絵馬から当時の様子を知ることができ、室町時代後期には大型化し、画題の多様化も進んだとみられる。

東北地方で紀年銘の残る最古の絵馬は嘉吉元年(1441)青森県七戸町・小田不動尊に納められたものという²。

山形県内の絵馬の状況を見てみると³、江戸時代以前で記念銘のある絵馬は[図表1]のとおりである。

特徴としては村山地方を中心とする内陸地方に集中していることで、寒河江慈恩寺にも数多くの絵馬がある。この他にも風化して年号は読めないものの、山形市山寺・地藏堂に納められた「曳馬図」には保管箱に「文治4年7月10日」の書き入れが見られる。

[図表1]の4、11、15は郷目右京進貞繁の作。家信(最上家信カ)銘のある、山形市・日枝神社の「猿曳馬図」、元和6年(1620)奉納、天童市・愛宕神社の「曳馬図」は最上家信の手になった可能性があるという⁴。

画題が多様化し馬が描かれないこともあるが、天正6年(1578)奉納の文字額に「絵馬」と記され、当時県内でも「絵馬」という呼称であったとわかる。



[写真1] 慈恩寺周辺(Google mapより転載)



[写真2] 慈恩寺本堂

図柄をみると、江戸時代後期以降のものには「寺社参詣図」が多く。奉納者の居住近くや、札所、出羽三山、蔵王など各地の寺社が対象となっている。学問(学芸)上達を願う絵馬では、天保10年(1839)に山形・天満神社奉納の「オランダ語百人一首」や和算の「算額」にみられる。女子の手習い中心であったお針稽古の様子を描いた「針子図」や子の上達を願ったとみえる「天神図」、「手習」・「童子参詣図」などがある。

人々の生活の様子を描いた「農耕図」や「四季農耕図」、「馬耕図」などは当時の農作業の様子を知る資料ともなり、「養蚕図」や「機織図」、「糸取り図」といった絵馬等も多く見られ、江戸時代後期から、明治時代に掛けての県内の産業の変遷を伝えている。

他にも「大工図」、「薄荷栽培製法図」、「酒樽作り図」、「社殿屋根葺図」、「砂金取り図」、「木流し図」、といった生業に関するものや、「植木踊図」や「願人踊図」、「田植踊図」、「祭禮図」といった祭りや踊りを描いた絵馬も見られる。

絵馬には地域の特色を反映したものも多く、馬の産地、最上町には多くの馬の絵が見られ、舟運で盛んだった土地では船絵馬がみられる。村山地方独特の絵馬としては「ムカサリ図」が知られている⁵。若くしてなくなった子供の追善供養として婚礼図を描き奉納したものである。

他にも絵馬には病氣治療を願った「目の図」、や「鶏図」豊穰を祈った「二股大根図」、魔除けとしての不動明王の「剣図」など様々な願いを背景に多種多様な絵馬が奉納されている⁶。

(3) 調査方法と実施処置

本堂絵馬調査では調書作成による作品寸法の測定などの状態調査と写真撮影による記録を行った⁷。

(状態調査)

今回の対象となっている絵馬は以前に悉皆調査が行われており、名称等の基礎情報は既に調査済みだった。そのため、調査にあたっては作品の状態記録を主として、寸法等の調書作成とともに、デジタルカメラにより作品の状態を記録した(使用機材:NIKON D700、NIKON D300S、SONY Cyber shot DSC-W35、SONY Cyber shot DSC-F828を使用)。作品設置場所は堂内長押上(地上高2m70cm)と高かったため、作品の詳細な状態を記録する為に、移動できるものは地上に降ろして調査記録を行った。写真は可能な限り保管時の状態、額縁も含めた全体図について記録し、銘及び落款・日付等の墨書・特徴的な損傷部についても可能な限り撮影、記録した。

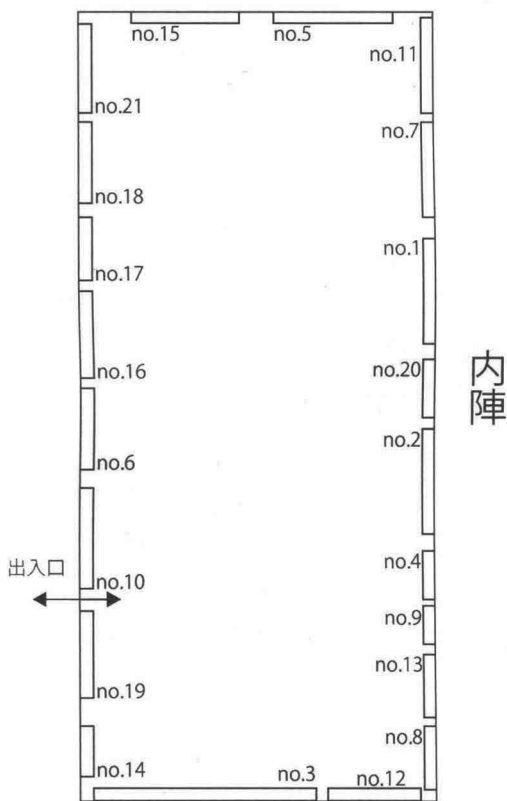
[図表1] 県内最古の絵馬

	名称	年代	所蔵場所	山形県の絵馬収録番号
1	装束官人図	天文10年(1541)	寒河江・慈恩寺	458
2	官人参詣図	天文12年(1543)	寒河江・慈恩寺	459
3	装束官人図	天文23年(1554)	寒河江・慈恩寺	460
4	繫馬図	弘治2年(1556)	南陽・薬師寺	1412
5	駿馬図	永禄元年(1558)	寒河江・慈恩寺	461
6	繫馬図	永禄元年(1558)	寒河江・慈恩寺	462
7	曳馬図	永禄6年(1563)	天童市・若松寺	269
8	曳馬図	永禄6年(1563)	山形市・吉祥院	51
9	笛吹図	天正5年(1577)	寒河江市・松本坊	629
10	三十六歌仙図	天正6年(1578)	寒河江市・慈恩寺	164~469
11	繫馬図	天正7年(1579)	米沢市・一宮神社	1392
12	繫馬図	天正8年(1580)	山形市・吉祥院	52
13	六頭馬と騎馬人図	天正8年(1580)	山形市・石行寺	2
14	十二支図	天正9(1581)	山形市・石行寺	3
15	繫馬図	天正22年(1594)	米沢市・成島八幡神社	1384
16	3 曳馬図	慶長6年(1601)	尾花沢市・円照	1150
17	繫馬図	慶長7年(1602)	尾花沢市、八幡神社	1141

撮影に加え、寸法、素材技法、保存状態、損傷状態についても作品移動時でないと確認できない裏面などは記録し、設置したままでも確認できるものは再調査を行い、確認した。

〈実施処置〉

絵馬の状態調査に合わせて、裏面の清掃等を行った。また、過度な損傷には再接着等の一時的な応急処置を行った。



内陣



[写真3] 慈恩寺本堂内と絵馬の配置

3. 調査報告

(1) 作品配置と設置状況

本堂内絵馬設置状況についてみると堂内外陣長押上に置かれ、針金を紐代わりにして軒桁などに設置された釘等と結び掲げられて設置されていた。針金などの吊り紐部分を外せば長押上から移動することが出来るものは半数で、残る絵馬は長押に額の下部を釘で固定されており、錆びた釘は容易に抜くことはできない状況だった。無理に釘を抜くと長押の部材を破損させてしまうため、作品調査時には移動しないまま記録を行った。本堂内の作品配置を見ると、年代として最も古い郷目右京進貞重筆の「繫馬図」と「駿馬図」が内陣に向かって二面並ぶ状態で奉納されている以外は特に規則はなく、年代も不揃いとなっており、大型の絵馬の隙間に小型の絵馬を埋めるように奉納されてきたと推測できるが、定かではない。

(2) 画題と素材

絵馬の寸法や画題についてはこれまでも悉皆調査が行われており目録が作成されている⁸。これによると本堂に奉納されている絵馬のうちでは郷目右京進貞重筆の「繫馬図」と「駿馬図」がもっとも古く⁹、次いで「草摺引き図」、「鉄塔額」、「南蛮人曳馬図」と続く。新しいものは昭和に入っているが、大半が江戸期のものとなっている。

年代が古いだけでなく、絵画的にも興味深く「繫馬図」と「駿馬図」は寒河江市指定文化財で、作者の郷目右京進貞重は武人画家として知られている。郷目氏は寒河江大江氏の氏族で、貞繁は寒河江十六代城主広種に仕えた。永正17年(1520)に伊達家との戦で捕虜となり、6年間も幽閉され、後に解放された後、絵師として活躍した。様々な画題を描いているものの、作品が特定されているものは多くないが、天童市若松観音堂の永禄6年(1563)の「曳馬図」は重要文化財となっている。作者銘には他に最上院篤斎筆や井田正九郎兼信といった名が記されている。井田正九郎兼信は寒河江市の古い画師で幼名は助十郎、青龍斎と号した。江戸に出て本格的に狩野派を学び、秀作を多く残し、作品が新町澄江地寺に多く残っている。御霊屋の襖絵(山水・寒山十得)、天井(龍)、鳳凰飛来図が優

れ、寒河江八幡御輿倉にも寛政四年「神宮皇后と武内宿祢」(法量:93cm×133cm)の絵馬がある。

また、作者は不明の「草摺曳図」は大半が風化しているが、京都清水寺に天正20年(1592)に奉納された長谷川久蔵(1568～1593)筆「朝比奈草摺曳図」と図様が酷似している¹⁰。「南蛮人曳馬図」は南蛮人が馬を引く珍しい図様で、半田正太夫という人物が描いているが作者の詳細は分からない。寒河江でもキリシタン追放が激化していた時期に奉納され、今日まで受け継がれている点で興味深い。

絵馬の素材としては指示体が板と紙が半々で、郷目の絵馬を除けば「七福神図」までは主に板に描かれている。紙に描かれている「七福神図」と「玄宗皇帝と楊貴妃図」の二点は調査した作品の中でも損傷が著しく、制作時期は18世紀中頃で、およそ250年近い年月を経ている。和紙を貼り補修した跡が見られるものの、現状のまま維持することは困難な状態となっている。以降は比較的紙に描かれた作品が多い。

4. 作品の状態報告

(1) 損傷状態

1) 紙本の損傷

損傷は江戸以前の全ての絵馬に見られた。絵本の絵馬の損傷状況について「福祿寿」を参考にみると、[写真4]左図に示した部分が、正面から見た際に本紙が損傷していた部分で、作品の周辺部と中央から、下部にかけて損傷が広がっていることが分かる[写真4]。画面上部の墨書の周辺は本紙が裏打紙から剥離して波打っている。

また、本紙表面を薄く削るような「虫ナメ」と呼ばれる虫の食痕が多数みられ、[写真4]の右図で示した範囲がこの損傷にあたる。「本紙損傷」と「虫ナメ」を重ねた[写真5]では左図により示した損傷部分と虫ナメ部分がほぼ重なることが分かる。このことから、本紙の損傷の多くは虫による影響があることがわかる。

[図表2] 慈恩寺本堂内の絵馬一覧(※は「山形県の絵馬」の記載番号)

No.	名称	作者	制作年代	材質技法	※
1	神馬図	郷目右京進貞繁	永禄元年(1558)	紙本着色	461
2	繫馬図	郷目右京進貞繁	永禄元年(1559)	紙本着色	462
3	草摺曳図	不明	元和4(1618)	板本着色	470
4	錢塔額	不明	元和6(1620)	板に古銭、朱	471
5	南蛮人曳馬図	半田正太夫	寛永15(1638)	板本着色	472
6	繫馬図	不明(落款有)	元禄9(1696)	板本着色	473
7	三番叟図	狩野政信	享保14(1729)	板本着色	474
8	曳馬図	不明	享保15(1730)	板本着色	475
9	宇治川先陣図	寒松軒	元文2(1737)	板本着色	477
10	七福神図	不明	寛保元(1741)	紙本着色	478
11	玄宗皇帝と楊貴妃図	□直	天明8(1788)	紙本着色	479
12	曳馬図	不明	天明8(1788)	紙本着色	480
13	神宮皇后と武内宿祢	井田正九郎兼信	文化2(1805)	紙本着色	483
14	鐘馗図	不明	文化9(1812)	紙本着色	485
15	三聖酢を甜むる図	不明(落款有)	文化9(1812)	紙本着色	486
16	屈原図	不明(落款有)	文化11(1814)	紙本着色	487
17	弁才天図	不明	文化12(1815)	紙本着色	488
18	福祿寿の図	最上院篤斎筆	文政6(1823)	紙本着色	488
19	武蔵坊弁慶衣川奮戦の図	不明	文政8(1825)	板本着色	490
20	奉納額	不明	明治18(1885)	板に彫刻	
21	山の図	宇清源野彦	昭和49(1971)	紙本着色	

また、画面の下部に損傷が集中しており、この傾向は他の紙作品にも同様であることから、作品の設置されている長押から額縁を伝い中央に向かって虫が浸入していると推測できる。

ところで、「福祿寿」では最下部には損傷が見られないが、これは損傷した本紙の上に補修の紙が貼られ、損傷が見えない為である。

画面上部の波打ちは本紙の浮きが原因だが、内部の本紙が接着していない為に、いずれは本紙が破損して甚大な被害に繋がり、作品No.11の様に破損する恐れがある。

また、作品を長押から降ろすと、裏面堆積した経年の塵埃が確認された[写真6]。斜めに掲げられているため、裏面に塵埃が堆積することで、紙本の作品では特に損傷が進んでいる。その傾向はNo.10「七福神図」とNo.11「玄宗皇帝と楊貴妃図」では顕著であった。

これらの事から紙本の絵馬は、壁面との設置箇所や堆積する塵埃が虫などの侵入経路となることで損傷が進むことが確認され、特に「玄宗皇帝と楊貴妃」では損傷のために骨組みが露出するまで傷んだ状態となっている。

2) 板本着色画に見る損傷

板を支持体とする絵馬は慈恩寺本堂では比較的古い紙本作品と異なり虫害により極度に損傷が進んだものは見られなかった。損傷について[写真7]「三番叟」をもとにみると、[写真7]においてで中央部の縦に走る部分は板の割れで、群像の衣服の部分は顔料(絵具)の剥落している箇所となっている。紙本作品と異なるのは額の周辺ではなく、描かれた色料に損傷が集中している点である。例えば衣服の顔料の剥落が進行している箇所では中心部分が抜け落ちるように剥落している。これは、顔料を定着させて



[写真4] 左:本紙損傷 右:虫ナメ



[写真5] 損傷と虫ナメ



[写真6] 絵馬の裏面に堆積した塵埃



[写真7] 「三番叟」の損傷地図

いる膠の接着力が弱くなるなどの原因や、経年の木材の痩せや、伸縮の影響が考えられる。剥落していない箇所もあるのは、色料の種類によって定着に差ができることで損傷の有無に繋がっているとも考えられる。その他の要因として剥落や損傷の進行は作品の環境によっても異なる為、断定はできないものの、板材の風化や剥落が進行すると、「草摺曳図」[写真8] [図表No.3]の様が確認し難い状態にもなってしまう。



[写真8] 「草摺曳図」の損傷地図(濃い部分は顔料が残っている箇所)

(2) 修理跡と応急処置

1) 修理跡

これまで虫などの影響から作品が損傷することが確認されたが、作品の中には過去に修理されたものも確認された。[写真9]は「福祿寿」修理跡である。長方形の和紙を用いて剥がれてくる本紙を抑えるように貼ってある。大まかな補修で、現代の修復では推奨されないものの、本紙の下部



[写真9] 「福祿寿」の過去の修理跡

の破損を食い止めて一定の成果を認めることはできる。幾層かに貼り重ねられていることから、破損に応じて修理を重ねて、或いは定期的に作品管理をしていた様子が分かる。

2) 応急処置

〈清掃〉

調査時に作品裏面の清掃や、損傷部の応急処置を行った。長押上に設置され続けて絵馬の裏面に堆積した塵埃は、そのままでは虫や黴の温床になり作品の損傷を進める。また、飛散する塵埃は周囲を汚すことにもなり、時には健康被害にも繋がる。そこで、長押から移動した絵馬については本堂の外に一度移動して、刷毛等を用いて裏面の塵埃を除去した[写真10]。清掃にあたっては、全員マスクを着用し、紙の作品は本紙自体が弱っているためできるだけ柔らかい毛の刷毛を用いた。画面については刷毛で触れるだけで色料が落ちそうであったため、清掃は裏面のみとした。

清掃をした際、作品裏面の墨書が確認された絵馬もあった。



[写真10] 裏面の清掃

〈一時接着〉

紙本着色の絵馬作品では本紙の破損が顕著なものが大半で、既に骨組みが露出しているものや、内部の支持層から袋状に剥がれている箇所も見られたため、早急な処置が必要なものも多かった。しかし、長押上から降ろせなかった作品も多かったことから[写真11]、修復されるまでの間、作品を延命させるような処置が必要だと考えた。そこで、設置場所から降ろすことができた作品は床に寝かせた状態で処置を行い[写真12]、移動できない作品は脚立上で処置を行った[写真11]。一時処置としては本紙の支持

層からの剥離をメチルセルロース水溶液(およそ重量比で3%程度)により接着させた。また、損傷により骨組みや絵馬の内部が露出している箇所は、骨組みと本紙の間にある下張り層の和紙に別の紙を指しこみ、接着の補強とした¹¹⁾。



[写真11] 本紙内部の一時接着



[写真12] 脚立上での一時接着

5. まとめ

絵馬の調査については『山形県の絵馬』をはじめ、多くの調査がなされている。その為、作品概要については『山形の絵馬』の成果を再確認することとなった。また、損傷状況などからみると、調査を行う際に清掃し、保管状況を改善することで作品の保存上、日常的な手入れの重要性を再認識することとなった。

調査時に清掃とともに応急処置を行い、めくれ返っていた本紙を再接着し、欠損部分を塞いだことで、絵馬の鑑賞性は大きく向上し、堂内全体の印象も改善したことは成果となった。まだまだ、処置の方法など改善の余地は多いものの、一例として「玄宗皇帝と楊貴妃図」をみると、処置前に比べ、鑑賞性が大きく改善して人物の姿等も確認できるようになっていることがわかる。作品全体をみると、現状では江戸中期頃の紙作品が最も危機的な損傷状態であると考えられる。その要因の一つには修理がされていないことも考えられるが、かつての修理跡からは定期的な応急処置を行っていた痕跡が見られることから、所謂「虫干し」が現代に入って行われなくなったことも作品の損傷が進んだ一因と考えられる。その意味でも調査時の応急処置は作品の保存環境の改善に寄与するといえる。

また、作品の損傷は必ずしも古い作品から傷むという訳ではなく、素材や環境によって傷み方が異なっている。今回の調査に限って言えば、最も古い郷目右京進貞繁の絵馬は最近修復され、現在は安定した状態となっている。絵馬の奉納された空間では価値を認められた作品の周辺に傷んだ絵馬が見られることは普通に見受けられる。貴重な作品の周辺にある作品も応急処置に際して処置を行い、保管環境を改善しながら、少しでも作品の保存に繋げることが絵馬の奉納空間にとって有効な手段であると考えられる。

No.1

作品名 神馬図
寸法(cm) 本紙 縦160.0 横216.0
制作年代 永禄元年(1558)
作者 郷目右京進貞繁
材質技法 紙本着色
備考 画面左に「永禄元年 四月五日
□目右京進貞重繁」



No.1

No.2

作品名 繫馬図
寸法(cm) 本紙 縦160.0 横216.0
制作年代 永禄元年(1558)
作者 郷目右京進貞繁
材質技法 紙本着色



No.2

No.3

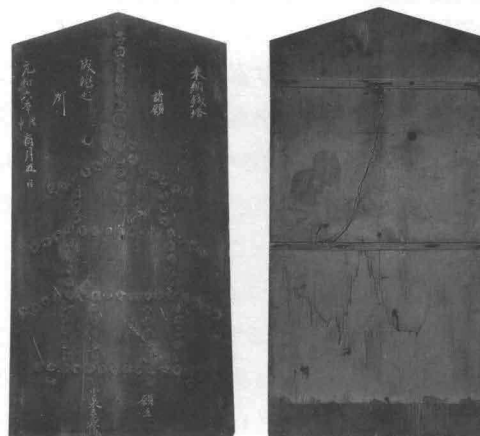
作品名 草摺曳図
寸法(cm) 本紙 縦179.0 横276.5
全体 縦180.5 横277.5
制作年代 元和四年(1618)
作者 不明
材質技法 板本着色
備考 画面右に「奉納」「五十嵐隼人」
左に「御寶前 □□成就也」



No.3

No.4

作品名 錢塔額
寸法(cm) 全体 縦84.1 横42.8
制作年代 元和六年(1620)
作者 不明
材質技法 板に古銭、朱
備考 画面上「奉納錢塔 諸願
成就□ □」「元和六年庚申□月五日」
画面下部「願主 小泉三□右□」



No.4

No.5

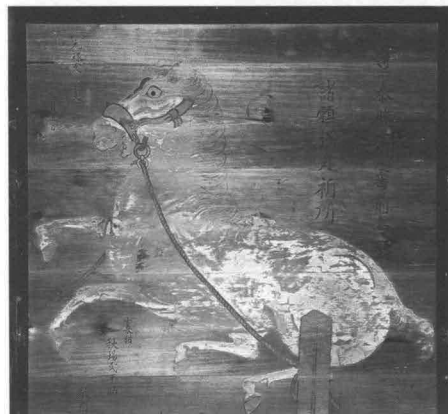
作品名 南蛮人曳馬図
 寸法 (cm) 本紙 縦114.0 横151.0
 全体 縦122.0 横158.5
 制作年代 寛永十五年(1638)
 作者 半田正太夫
 材質技法 板本着色
 備考 寒河江の住人守屋三十郎が奉納



No.5

No.6

作品名 繫馬図
 寸法 (cm) 本紙 縦165.9 横167.4
 全体 縦180.5 横182.3
 制作年代 元禄九年(1696)
 作者 不明 画面左下に落款あり
 材質技法 板本着色
 備考 画面左に「元禄九丙子天 七月五日」
 「小泉村秋場氏平助 敬白」
 画面右に「(梵字)奉懸御寶前馬形
 諸願満足祈所」とある
 * 梵字は「ユ」弥勒菩薩



No.6

No.7

作品名 三番叟図
 寸法 (cm) 本紙 縦174.5 横174.0
 全体 縦193.5 横193.0
 制作年代 享保十四年(1729)
 作者 狩野政信
 材質技法 板本着色
 備考 画面右上に「奉掛 御寶前」
 画面右端に「享保十四歳」
 右下に銘と花押(銘は判読不明)
 画面左端に「巳酉六月吉日」
 画面左下に「狩野圖書政信(丸印)」
 裏面「羽品最上瑞寶山 彌勒慈尊御寶前」
 「慈恩寺山主別當四拾壹代最上院幸茂敬白」



No.7

No.8

作品名 曳馬図
 寸法 (cm) 本紙 縦50.2 横83.2
 全体 縦60.6 横94.0
 制作年代 享保十五年(1730)
 作者 不明
 材質技法 板本着色
 備考 画面上に「奉掛所願成就皆令満足處」
 画面左に「享保十五庚戌歳九月五日」
 「井上氏嘉近敬白」



No.8

No.9

作品名 宇治川先陣図
 寸法(cm) 本紙 縦79.7 横100.4
 全体 縦90.0 横110.7
 制作年代 元文二年(1737)
 作者 寒松軒 画面左下に「寒松軒(立方印)」
 材質技法 板本着色



No.9

No.10

作品名 七福神図
 寸法(cm) 本紙 縦148.6 横175.8
 全体 縦157.3 横184.5
 制作年代 寛保元年(1741)
 作者 不明
 材質技法 紙本着色
 備考 画面左に「寛保元辛酉歳天初□吉日」
 「奉納諸願成就所」
 右下に墨線の痕跡



No.10 処置前



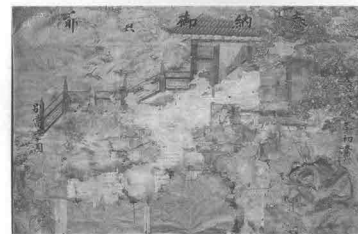
No.10 処置後

No.11

作品名 玄宗皇帝と楊貴妃図
 寸法(cm) 本紙 縦122.7 横179.2
 全体 縦130.3 横187.0
 制作年代 天明八年(1788)
 作者 □直
 材質技法 紙本着色
 備考 画面右に「天明八戌□年初冬」「□直筆」
 画面上部に「奉納御寶前」
 画面左に「別當幸圓」



No.11 処置前



No.11 処置後

No.12

作品名 曳馬図
 寸法(cm) 本紙 縦107.9 横132.7
 全体 縦114.5 横138.3
 制作年代 天明八年(1788)
 作者 不明
 材質技法 紙本着色
 備考 画面上に「奉納御寶前」
 画面右下に「別當□□□(花押)」
 左に「天明八戌申年初冬」



No.12

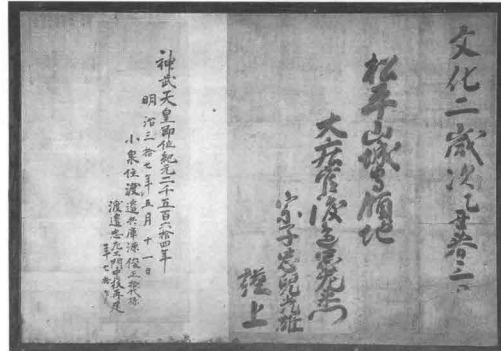
No.13

作品名 神宮皇后と武内宿祢
 寸法(cm) 本紙 縦106.5 横152.5
 全体 縦115.0 横160.0
 制作年代 文化二年(1805)
 作者 井田正九郎兼信
 材質技法 紙本着色
 備考 画面上に「舎□勇助光信者嗣谷地西□
 氏□常嗜画宿嘗誓企自画而以呈寶前
 就而不脱稿享和三年癸亥秋九月
 念五日以麻后痢不幸天□時年□
 五追悼其志□遂請其師寒江□龍
 齋井田兼信託其素意圖全成矣文
 化二歲次乙丑三月五日小泉渡部忠左
 衛門俊雄宗子忠□光雄謹懸焉

裏面に 文化二歲次乙丑春三■
 松平山城守領地大□□渡邊忠左□門
 家子忠□光繼

謹上

神武天皇即位紀元二千五百六拾四年
 明治三拾七年五月十一日
 小泉住渡邊兵庫源俊正拾代孫
 渡邊左工門中校再建年七拾才



No.13

No.14

作品名 鐘馗図
 寸法(cm) 本紙 縦92.6 横55.5
 全体 縦99.0 横62.0
 制作年代 文化九年(1812)
 作者 不明
 形態 額装
 材質技法 紙本着色
 備考 画面左に「文化九壬申□三月」
 「川越兵吾 重教(花押)」
 画面右上部に「奉納 願□就」



No.14

No.15

作品名 三聖酔を甜むる図
 寸法(cm) 本紙 縦159.0 横101.0
 全体 縦151.5 横 93.5
 制作年代 文化九年(1812)
 作者 不明 (落款あり 写真参照)
 材質技法 紙本着色
 備考 画面右上に「奉納」
 画面に「文化九壬申霜月吉日」
 「東漸院光俊 敬白」とある



No.15

No.16

作品名 屈原図
 寸法(cm) 本紙 縦124.0 横1.09.9
 全体 縦130.0 横115.5
 制作年代 江戸後期 文化十一年(1814)
 作者 不明 画面左下に落款あり
 材質技法 紙本着色
 備考 画面上部に「奉納」とある
 画面左に「文化十一甲戌七月吉日」
 「願主 亮信(花押)」

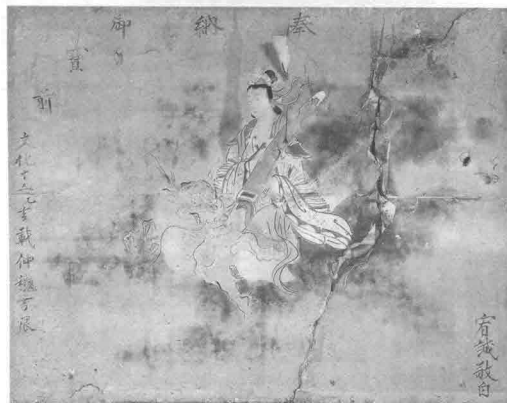


No.16

No.16 斜光写真

No.17

作品名 弁才天図
 寸法(cm) 本紙 縦74.0 横91.5
 全体 縦77.0 横91.5
 制作年代 文化十二年(1815)
 作者 不明
 材質技法 紙本着色
 備考 画面上部から左へ「奉納御寶前」とある
 画面右下部に「宥誠敬白」
 画面左に「文政十二乙亥戴仲□吉辰」



No.17

No.18

作品名 福祿寿の図
 寸法(cm) 本紙 縦168.0 横96.0
 全体 縦177.0 横105.0
 制作年代 文政六年(1823)
 作者 最上院篤斎筆(「山形の絵馬」より)
 材質技法 紙本着色
 備考 画面左に「文政六癸未歲九月五日」
 右に「吾夫伏病久矣予諸巡宮而
 祈平癒一百餘日也誠心之
 □感出九死得一生者實因
 擁護之靈驗也乃掛画□
 一□於 寶前聊表歡喜
 心以奉慰 神意云」とある
 左下部に「川越 惣左衛門重□
 妻 敬白」とある



No.18

No.19

作品名 武蔵坊弁慶衣川奮戦の図
 寸法(cm) 本紙 縦127.0 横164.6
 全体 縦139.8 横176.9
 制作年代 文政八年(1825)
 作者 不明
 形態 額装
 材質技法 板本着色



No.19

No.20

作品名 奉納額「新四国八十八箇所 第五十九番」
 寸法(cm) 本紙 縦44.2 横90.0
 全体 縦54.5 横100.2
 制作年代 明治十八年(1885)
 作者 不明
 材質技法 板に彫刻
 備考 画面に「新四国八十八ヶ所 第五十九番 守護のため 建帝阿可む留 慈恩寺ハ 三呂久菩薩の 浄土那りけ厘 寄付人 華蔵院 住職 明治十八年 酉十月 武田光昌」
 画面左上に「明治十八年酉年」



No.21

作品名 山図
 寸法(cm) 本紙 縦51.5 横168.0
 全体 縦67.0 横182.5
 制作年代 昭和四十九年(1971年)9月5日
 作者 宇清源野彦
 材質技法 紙本着色
 備考 額縁に「奉納 山形駅前 吉田吉助」



謝辞

本調査に際し、寒河江市教育委員会、慈恩宗慈恩寺には格別のご配慮を賜った。記して感謝致します。

註

1. 「角川日本地名大辞典 山形県」p.365、角川書店、1981による。
2. 『東北の絵馬展』1977 仙台市博物館

3. 「山形県の絵馬概観」『山形県の絵馬』山形県立博物館1985による。
4. 宮島新一「最上家信奉納の神馬図」『歴史館だよりno.17』p.2～p.4最上義光歴史館2010
5. 「供養絵額」p.11、遠野市立博物館、2005
6. 前掲注2による。
7. 調査期間は
 〈本調査〉平成23年11月14日(月)、12月5日(月)、12月6日(月)
 〈予備調査〉平成24年3月8日(月)
8. 前掲注2による。
9. 郷日右京進貞重筆「繫馬図」「駿馬図」については既に修理されており、今回は調査対象とはしなかった。
10. 「絵馬 清水寺」p.85及び図版、清水寺、1981による。
11. 大山龍顕『地域に所在する絵馬の応急処置に関する一考察』「文化財保存修復学会 第35回要旨集」p.338～p.339、文化財保存修復学会、2013
 尚、応急処置の取り組みは私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22年度～平成26年度)「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力向上システムの研究」の取り組みによる成果を反映している。

[参考文献]

- 1) 「平成23年度 文化財保存修復研究センター研究成果報告書」、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター、2012
- 2) 「平成24年度 文化財保存修復研究センター研究成果報告書」、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター、2013
- 3) 「角川日本地名大辞典6 山形県」角川書店、1981
- 4) 「寒河江市史」寒河江市史編纂委員会、1999
- 5) 「山形県の絵馬概観」『山形県の絵馬』山形県立博物館1985
- 6) 「郷日右京進貞繫」財団法人最上義光歴史館、
- 7) 「続山形県芸術文化史」山形県芸術文化会議、1983
- 8) 「図解 日本画用語事典」東京芸術大学大学院文化財保存修復学日本画研究室、2007
- 9) 三浦定俊・佐野千絵・木川りか「文化財保存環境学」浅倉書店、2008

[執筆者]

大山 龍顕
 Tatsuaki OYAMA
 文化財保存修復研究センター
 Institute for Conservation of Cultural Property
 専任講師／研究員
 Lecturer／Researcher